

研 究 報 告

日本大学(板橋病院)小児科 大 国 真 彦 林 勝 昌

I. 家族性高脂血症の検討

研究目的: 前年度の継続と共に51年度には家族性高脂血症の検討を行った。小児期からのこの方面の検討はまだ少ない様である。

研究方法: 食生活の影響の大きいいわゆる二次性高脂血症とは異なる、遺伝的支配の強い、家族性にみられる一性高脂血症について検討した。

研究成績: 両親のどちらかにやはり高脂血症がみられた4例と学校健診で高脂血症を指摘されその家族内に高脂血症を有する者が3例あった。家族性高脂血症児童の男女別内訳は2例づつで児童のコレステロールは207~314 mg/dlで、両親のコレステロールは217~380 mg/dlに属していた。児童には高血圧や肥満は伴っていない。脂質分析では2例がIIa型でβ-リポ蛋白が80~92%に上昇していた。最年少は3才女児でコレステロール378 mg/dlである。これらの更に詳細な家系調査を追求中である。

第1例は7才男児で総コレステロール314 mg/dlで父親のそれが380 mg/dlでタイプIIaであった。第2例

は3才女児で総コレステロール378 mg/dlで母親のそれが217 mg/dlでタイプIIa, 第3例は10才男児で総コレステロール207 mg/dlで母親のそれが235 mg/dlであった。第4例は9才女児で総コレステロール246 mg/dlで母親のそれが234 mg/dlであった。いずれも両親のどちらかに高脂血症がみられた。第1例は発熱を主訴として入院し偶然に高脂血症を発見した。第2例はアデノイドの術前検査で高脂血症を指摘されたものである。これらの例には肥満や高血圧もなく未発見の高脂血症を有する児童の存在を考えさせる。その他に学校健診で高脂血症を指摘されその家族歴にも高脂血症を有する者が3例あったしMCLSでコレステロールが200 mg/dl以上の者が例みられた。動脈硬化と直接に結びつく病理症例には接することができなかった。

考按と総括: 家族性高脂血症に関してはアンケートを中心に更に家系内調査と食生活を含めた環境の掘りさげをしていく予定であるが、小児期にこのような例がみられることは動脈硬化予防上大きな意義を有すると考えられた。

研 究 報 告

日本大学(板橋病院)小児科 大 国 真 彦 林 勝 昌

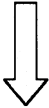
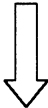
II. Field に於ける小児高脂血症例の検討

研究目的: 動脈硬化予防の為に小児期の高脂血症例の頻度と実態につき検討せんとした。

対象と方法: 昭和50年度東京都内学童検診の二次検査者を採血し、コレステロール値を検討し、さらに200 mg/dl以上の高コレステロール血症を有する児童を選出

し電気泳動法でリポ蛋白分画を検討すると共に血圧及びその家族歴について合わせて検討した。

研究成績: 血清総コレステロール値に関しては都内A小学校で受診者中4.83%, B小学校で4.3%, C中学校で4.65%, D中学校で2%の高脂血症がみられた。高血圧に関しては収縮期血圧140 mmHg以上は3例にみられた。両親のコレステロール値に関しては220 mg/dl以

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

. 家族性高脂血症の検討

研究目的:前年度の継続と共に 51 年度には家族性高脂血症の検討を行った。小児期からのこの方面の検討はまだ少ない様である。

研究方法:食生活の影響の大きいいわゆる二次性高脂血症とは異なる, 遺伝的支配の強い, 家族性にみられる一次性高脂血症について検討した。

研究成績:両親のどちらかにやはり高脂血症がみられた 4 例と学校健診で高脂血症を指摘されその家族内に高脂血症を有する者が 3 例あった。家族性高脂血症児童の男女別内訳は 2 例ずつで児童のコレステロールは 207 ~ 314mg/dl で, 両親のコレステロールは 217 ~ 380mg/dl に属していた。児童には高血圧や肥満は伴っていない。脂質分析では 2 例が a 型で -リポ蛋白が 80 ~ 92%に上昇していた。最年少は 3 才女児でコレステロール 378mg/dl である。これらの更に詳細な家系調査を追求中である。